

ビザンティン世界における「知」の共同体的構造¹
－「不断の宇宙論」としての典礼を基点に－
秋山 学

報告者は2001年、中世哲学会大会にて拙著『教父と古典解釈—予型論の射程—』の書評会を催していただく光栄に与かった。拙著は、10世紀のビザンティンに開花するマケドニア朝ルネサンスの旗手の一人、カエサリアの大司教アレタス(849/50 - 944)の収集蔵書に見られる人文主義的傾向を、彼自身の普遍救済論(アポカスタシス)的神学から解明する試みを出発点とし、そのような傾向が、4世紀におけるカパドキア教父たち、さらに遡っては2 - 3世紀、アレクサンドリアのクレメンス(150 - 215)のうちにすでに認められたことを立証しようと試みたものである。アポカスタシスの神学観と予型論的歴史観、それと人文主義的発想の間に、相互に関連する普遍主義的神学の視座が認められるというのが一応の結論であった。

拙著発刊後、中東欧に現在も息づくビザンティン典礼の共同体のうちに身を置き、典礼の実体験を通じて、拙著の中で提起された問題に対する新たな視角を切り拓こうと努めてきた。具体的には、2005年から半年間におよぶハンガリー・ギリシア・カトリック教会(GK)神学院での在外研究、2006年から毎年続けているハンガリー教父学協会大会での口頭発表、そして2007年と2008年の二度の春におけるGKでの復活節の典礼体験がこれに数えられる。特に復活祭が2007年は4月8日に、2008年には3月23日に行われ、2007年には受難節の典礼に、2008年には復活祭からの1週間(「光の週」)の典礼に与かったことで、ビザンティン典礼が、キリストの受難と復活をどのように典礼上に表現しているかを実地に味わうことができた。

今回、「制度と学知」という総括テーマをギリシア教父からビザンティン世界において考えてみるにあたり、拙著で取り上げられた問題、すなわち予型論と人文主義、マケドニア朝ルネサンスにおける小文字本の出現と文献学的関連、聖画像崇敬運動と修道院改革、といったさまざまなテーマを、ハンガリーでのビザンティン典礼の実体験に照らして考察することを試みた。<ビザンティン世界においては、アリストテレス論理学の継承など一部の例外を除き、神学と世俗的学問の交流を見出すのは難しい>とされてきた従来の通説に対して、ビザンティン典礼が、ある意味でアリストテレス的神学体系を実に美しく表現したものだということを、本報告で示すことができれば幸いである。

ビザンティンにおける「ルネサンス」の時期と呼ばれるマケドニア朝は、867年に即位したバシレイオス1世(在位867 - 886)によって創始される。彼は、726に始まり787年に一旦終息し、814年に再燃し843年に再終息した聖画像破壊運動後の時期を回復に向かわせ、ビザンティン帝国の国力を充実させた。そして「マケドニア朝ルネサンス」と呼ばれる文化的開花の時期は、その子である賢人皇帝レオ1世(866 - /在位870; 886 - 912)と、孫であるコンスタンティノス1世ポルフィロゲネトス(905 - /在位908/912/945 - 959)の2代において開花する。ポルフィロゲネトスが没した後は、ロマノス1世(在位959 - 963)の事故死を承け、ニケフォロス1世(在位963 - 969)、ヨハネス1世ツィミスケス(在位969 - 976)という2代続く軍人皇帝の即位があり、古典復興の時期は事実上、レオ1世とポルフィロゲネトスの2代に限られると言える。彼らは、先述のアレタスから1世代下った時期に位置している。

二人のうち、とりわけポルフィロゲネトスの時期に、古典復興の機運は高まりを見せる。彼は、幼

¹ 本稿は、2008年11月15/16の両日にわたり明治学院大学横浜校舎にて行われた、中世哲学会第57回大会シンポジウム「制度と学知」【連動特別報告1およびパネリスト】のために準備した拙稿「ビザンティン世界における「知」の共同体的構造 「不断の宇宙論」としての典礼を基点に」を基にしている。

くして共同皇帝に指名されたものの、岳父ロマノス 世レカペノス(在位 920 - 944)らによる摂政政治が続いたために、単独で帝位に就いたのは 945 年になってからであった。この冷遇のためもあってか、彼は学問全般に強い関心を示して百科全書主義的傾向を見せ、特に歴史に造詣深く、古代の歴史家たちの抄録を編纂したが、この時期に古典著作家の諸作品を集め筆写させたものと考えられる。実際、現存する古典諸作家の最古の写本としては、この時期のものもしくはその次の代の写本、すなわち 10 世紀または 11 世紀に遡るものがほとんどである。以下に主要古典ギリシア著作家の古写本を一覧表にして掲げよう。

〔韻文〕

ホメロス 『イリアス』 A ヴェネツィア 454, 10 世紀 B ヴェネツィア 453, 11 世紀

『オデュッセイア』 L(4) フィレンツェ 32.24 10/11 世紀

ヘシオドス 『神統記』 B パリ suppl. gr. 663 (アトスより) 11/12 世紀(欠けあり)

『農と暦』 C パリ 2771 10 世紀

テオグニス A パリ 388 10 世紀

アイスキュロス M フィレンツェ 32.9 10 世紀(960 - 980?)

ソフォクレス L フィレンツェ 32.9 10 世紀

エウリピデス M ヴェネツィア 471 11 世紀 B パリ 2713 11 世紀

アリストファネス R ラヴェンナ 137.4a 10 世紀 ヴェネツィア 474 11 世紀

アポロニオス・ロディオス L フィレンツェ 32.9 10 世紀

アラトスとリュコフロン M ヴェネツィア 476 11 世紀

〔散文〕

アテナイオス A ヴェネツィア 447 10 世紀

ルキアノス Γ ヴァティカン 90 10 世紀 E 大英博物館 Harleianus 5694 10 世紀

Φ フィレンツェ Conv. Soppr. 77 10 世紀 Ω ヴェネツィア 840 10/11 世紀 L フィレンツェ 57.51 11 世紀

S モデナ a. V. 8. 15 11 世紀 B ウィーン 123 10/11 世紀 U ヴァティカン 1324 10/11 世紀

ヘロドトス A フィレンツェ 70.3 10 世紀中葉 B ローマ Angelicanus Augustinorum 11 世紀中葉

C フィレンツェ suppl. 207 11 世紀中葉 D ヴァティカン 2369 11 世紀中後

トゥキュディデス C フィレンツェ 69.2 10 世紀 A パリ suppl. gr. 255 11-12 世紀 B ヴァティカン 126 11 世紀

E ハイデルベルク 252 11 世紀 F ミュンヘン 430 11 世紀

ポリュピオス A ヴァティカン 124 10 世紀

アッピアノス ヴァティカン 141 11 世紀

ディオソ・カッシオス L フィレンツェ 70.8 11 世紀 M ヴェネツィア 395 11 世紀

ディオドロス P パトモス 10/11 世紀 D ウィーン 79 11 世紀

ディオニュシオス・ハリカルナッセンシス A ローマ〔キジ〕58 10 世紀

ヨセフス P ヴァティカン〔パラティヌス〕14 9/10 世紀 A ミラノ F. 128 11 世紀

イソクラテス Γ ヴァティカン〔ウルピノ〕111 9/10 世紀 Λ ヴァティカン 65 1063 年(テオドロスによる)

デモステネス S パリ 2934 10 世紀前半 A ミュンヘン 485 10 世紀 F ヴェネツィア 416 10 世紀

Q ヴェネツィア 418 10 世紀 Y パリ 2935 10/11 世紀 P フィレンツェ〔ブルテウス〕69.9 10/11 世紀

プラトン

B オックスフォード〔ボドレイアン, クラーク〕39 895 年 ()

A パリ 1807 9/10 世紀 ()

O ヴァティカン 1 9/10 世紀

テオフラストス A パリ 2977 10/11 世紀 B パリ 1983 10 世紀

フィロン R ヴァティカン 316 9 世紀 S オックスフォード〔セルデン〕12 10 世紀

V ウィーン〔ギリシア神学〕29 11 世紀

この時代の人文主義者としては、後にコンスタンティノポリスの総主教となったフォティオス(810 - 893)がアレタスの一世代以前に位置するが、彼の蔵書の読書記録である『図書総覧』は、おそらくテオフィロス 世(在位 829 - 842)が数学者レオン(790 - 869)らに講座を提供した際の、フォティオスによる協力の産物であろう。フォティオスは、次代の皇帝ミカエル 世(在位 842 - 867)により、副帝バルダスの暗躍もあって、858年コンスタンティノポリス総主教として立てられる(総司教イグナティオス 847 - 858 は一時廃位される)。860年ごろ、先の講座を母体として、そのバルダスにより首都のマグナウラ宮に帝国大学が再興される。この大学の前身は、425年テオドシウス 世により創設された帝立大学であり、863年には文法学・幾何学・天文学・哲学の4講座を備えたが、10世紀の末に消滅したとされ、ポルフュロゲネトスの次代の政治的混乱の大きさをうかがわせる。

さて、アリストテレスの伝承はどうなっているであろうか。アリストテレスの伝承は、作品によって写本が異なる。論理学書すなわち「オルガノン」に関しては、その知識が中世初期を通じて広く流布していたことが知られるように、その写本は多数存在する。10世紀以前に遡ると思われる写本だけに限ってみても、次の三つが挙がる。

- B ヴェネツィア 201 954/5年 『カテゴリー』 『命題論』 『分析論』 『トピカ』 『詭弁論駁論』
- A ヴァティカン〔ウルピノ〕 35 9/10世紀(888-901) 『分析論』 『トピカ』 『詭弁論駁論』
- n ミラノ L.93 9世紀 『カテゴリー』 『命題論』 『分析論』 (31a18-)

これらのうちB写本はエフライムという名の博識な修道士の手になる。彼が同時期、他に写したもののとしては、上に一覧表として掲げたもののうち、ポリュピオスのA写本(947年)がある。そのほか、Athos Laura B 64(使徒行録と書簡)および Vatopedi 949(福音書)、それにヴェネツィアの Marcianus IV 1, 5-212(プラトン〔T〕テトラロギア 1 - 7と8の一部)も彼の手による。一方A写本は副助祭グレゴリオスの手になり、これはアレタスの蔵書の中に含まれていたことが知られている。

もっともアリストテレスの作品としては、自然学関係の書目についても、この「マケドニア朝ルネサンス」の時期にちょうど重なるように写本が現れている。すなわち、『自然学』 『天体論』 『生成消滅論』 『気象論』、それに『靈魂論』 『形而上学』、『動物部分論』の f.344 までは、パリのE写本(1853)があり、これは9/10世紀に遡る。これには『動物運動論』 『動物歩行論』 『動物発生論』 『自然学小論集』が付加されているが、これは14世紀、フィリアティデスの手になる。またウィーンのJ写本(100)も10世紀に遡り、こちらは『自然学』 『天体論』 『生成消滅論』 『気象論』 『形而上学』を含んでいる。このようにアリストテレスの自然学書は写本伝承上『形而上学』とセットになって伝えられていたことが知られる。ちなみにアリストテレスの他の作品についてもその写本伝承を確認しておく。

- ・『動物生成論』 Z オックスフォード〔コルプス・クリスティ〕 108 9/10世紀
- ・『ニコマコス倫理学』 Kb フィレンツェ 81.11 10世紀
- ・『政治学』 Vm ヴァティカン 1298 10/11世紀
- ・『弁論術』 『詩学』 Ac パリ 1741 10/11世紀
- ・『問題集』〔偽書〕 P パリ 2036 10世紀(偽ロンギノス『崇高について』を ff.178-207 に含む)となっている。

こうして、ポルフュロゲネトスが古典の複製を求めたことに即応するかのようになり、10世紀以降はアリストテレスの複製も活発化する。彼が単独皇帝であったのは945年から959年の間であるが、先のエフライム修道士の活動時期は、このポルフュロゲネトスの統治期間に完全に含まれる。ポルフュロゲネトスの懇意に応じて、エフライムが写本筆写を行った可能性もありえよう。そして、彼の活動に如実に現れているように、修道士として日々の祈祷スケジュールをこなしながら、アリストテレスの論理学書、さらには歴史家の作品を筆写するという活動が、そのころは当然ありえたのである。そしてポルフュロゲネトスの指針は「百科全書主義的」と評されることがあるが、アリストテレスはいわばその主義を支持する根拠であるかのごとくに、その筆写活動が進められてゆく。

さてアレタス以降の写本にあっては、上述したエフレムやグレゴリオスのごとく、その写字生と筆

写年代が特定されるものが登場する。そのうち最も古くに遡るのは835年、ストディオス修道院のニコラオス・モナコスによって筆写された小文字本、いわゆる「ウスペンスキの福音書」である（ペテルスブルク 219）。

こうしておそらく、9世紀に聖画像崇敬の牙城となったストディオス修道院での小文字体開発を契機に、同修道院から発展したであろう写本筆写活動が、マグナウラ宮への学問所の設置に伴って帝宮内にも伝播し、ポルフェロゲネトスによる文芸復興の機運を支えたものかと思われる。なおこの大学は、2世紀のちの1047年には、コンスタンティノス 世モノマコス（在位 1042 - 1055）の下に、哲学部と法学部として再開学する。

さて、現行ビザンティン典礼の典文のなかには、このポルフェロゲネトス、それにその父親である賢人レオ皇帝の手に遡る部分がある。以下、典礼との関連でビザンティン思想に光を当ててみたい。そのためにはビザンティン典礼の概説が不可欠であろう。ビザンティン典礼の一日は晩課から始まり、おもな祈禱としては、朝課と聖体礼儀、それに時課があげられる。本報告では、このうち特に朝課の式次第に注目したい。

まず、ビザンティン典礼における標準的な朝課の概要を以下に示そう。〈 〉で括ったのは歌詞の名である。

1 開祭 2 ヘクサブサルモス（詩篇） 3 大連禱 4 〈主は神〉 5 トロパール 6 カティズマ 7 小連禱 8 カティズマーリオン 9 多憐歌 10 復活讃歌 11 昇階唱 12 プロキメン 13 福音朗読 14 〈キリストの復活を目にして〉 15 詩篇第50篇 16 福音接吻スティヒラ 17 連禱 18 カーノン - 歌 19 イパーコイ 20 カーノン - 歌 21 コンターク 22 イコス 23 カーノン・歌 24 歌カタヴァーシア前句 25 カーノン 歌前讃歌 26 カーノン 歌 27 〈主は聖〉 28 「光の歌」 29 〈すべての霊は〉 30 讃美スティヒラ（4～8） 31 福音スティヒラ 32 大栄唱〔週日は小栄唱〕 33〔週日は先句スティヒラ〕 34 〈聖なる神〉 35 トロパール 36 三重連禱 37 完遂連禱 38 閉祭

ちなみに、晩課の一般的な構造は次のようになっている。

一、「常なる初め」 二、詩篇第103篇 三、大連禱 四、カティズマ 五、小連禱 六、〈主よあなたに向かって〉 七、〈主よあなたに向かって〉の後のスティヒラ 八、〈神の穏やかなる光〉 九、プロキメン 十、三重連禱 十一、〈われらの主よ、この夜〉 十二、完遂連禱 十三、先句スティヒラ 十四、「聖シメオンの歌」 十五、〈聖なる神〉 十六、大散会定式

コンスタンティノス 世ポルフェロゲネトスによる作とされているのは、上掲の朝課のうち28「光の歌」と呼ばれる部分である。一方31「福音スティヒラ」の部分は父親のレオが作ったとされている。これらはいずれも、主日の朝課で朗読される「復活の福音」と連動している。この「復活の福音」は、計11箇所構成されている。その箇所とは 順に マタイ 28.16-20 マルコ 16.1-8 マルコ 16.9-20 ルカ 24.1-12 ルカ 24.12-35 ルカ 24.36-53 ヨハネ 20.1-10 ヨハネ 20.11-18 ヨハネ 20.19-31 ヨハネ 21.1-14 ヨハネ 21.15-25 である。これらは、聖霊降臨の主日（復活の50日後）より、から毎週主日の朝課（13の部分）で順に朗読し、主日ごとにこれを繰り返す。復活週すなわち光の週には朝課での福音朗読はなく、復活節第2主日つまりトマスの主日から聖霊降臨までは、11個のうちから定められた各々の日に定められた箇所を朗読する。そして「光の歌」も「福音スティヒラ」も11種あり、1から11の朗読箇所と一致する番号のものをその主日に読むことになっている。

では以下、ポルフェロゲネトスによる「光の歌」を紹介することにしよう。

光の歌 「われらは弟子たちとともに、ガリレアの山に登り、信をもってキリストを見よう。主はこう言われた、〈わたしは上にある者、下にある者に対する力を得た〉と。主が弟子たちに言われたように〈すべての民に、父と子と聖霊の名において洗礼を受けよ〉

と教えられたわけを理解し、主が約束のとおり、時の終わりまで間違いなく共におられることを悟ろう」

光の歌 「油を携える婦人たちは、石が転がしてあるのを見て喜んだ、墓に一人の若者が座っているのを目にしたので、子の若者は彼女たちにこう言った。〈見よ、キリストは復活された。ペテルと弟子たちに告げよ、《ガリレアの山へ急ぎなさい、そこで、以前に告げておいたように、友としてあなたがたとまみえよう》と〉」。

光の歌 「キリストは復活された。このことは誰も疑ってはならない。主はマリアに現れ、その後、ある村へ向かう者たちに姿を現し、高間にいた 11 人の弟子たちにも現れて、洗礼を受けるために彼らを遣わし、天に昇って、そこから降臨し、多くの奇跡をもって信の告知を強められる」。

光の歌 「徳において光を受けたわれらは、生命をもたらす墓に、光り輝く衣を身にまとった若者が、油を携え顔を地面の方に伏せる婦人たちの傍らに立つのを見る。天上への治め主の復活を理解し、ペテルとともに生命の墓へ向かって走り、驚嘆をもってキリストを見ることができるよう」。

光の歌 「生命にして道であるキリストは、死者の中から復活した。クレオファ、ルカとともにエマオへの道を行き、パンを割くときに自らを彼らに証された。彼らの心と霊は、主が道すがら彼らに語りかけ、彼らの前で聖書を解説し、どのように苦難を被り、どのように復活したかを説明したときに燃え立った。われらは〈ペテルにも主は現れた〉と告白する」。

光の歌 「われらの救い主よ、あなたは自らが**実体として** (kat'ousian) 人間であることを示そうと望み、死者からの復活の後、弟子たちの間に立ち、彼らと食事を共にし、彼らに罪の赦しのための洗礼について教えられた。その後ほどなくして御父の許に挙げられたが、弟子たちには、彼らの許にいと神的なる聖霊を遣わすと約束された。おお神にして人なる主よ、あなたの復活に栄光あれ！」。

光の歌 「マリアが〈主が取り去られました〉と告げると、シモン・ペテルと、キリストが愛されたもう一人の弟子は、墓に向かって走った。二人は共に走ったが、墓には亜麻布が置いてあるだけで、頭のほうには覆いが別にたたまれていた。だが彼らは、自分の目でキリストの姿を見るまでは、祈っていた」。

光の歌 「マリアは墓で二人の天使を目にし、狼狽してキリストとはまだ判らずに、園丁だと思ってこう尋ねた。〈主よ、わたしのイエスの遺体をどこへやったのですか？〉しかし彼女は、それが救い主自身だということを、次の言葉を耳にして気づいた。〈わたしに触れてはならない、わたしは父の許に行く。このことをわが兄弟たちにも告げよ！〉と」。

光の歌 「われらの治め主よ、あなたは閉ざされた扉を通して部屋の中へ入り、平和の挨拶とともに彼らに息を吹きかけ、使徒たちをいと聖なるあなたの霊で満たすと、彼らにこう言われた。〈この霊をもって、あなたがたは諸々の罪をつなぐことも、解くこともできる〉と。8 日後にあなたは、トマスにも自らの傷と両手を示された。トマスとともに、われらもまたこう歌う。〈あなたはわが主、わが神〉と」。

光の歌 「ティベリアス湖において、ゼバダイの子ら、ナタナエルとペテル、それに他の二人の弟子たちとトマスが網のわきにいた。そしてキリストの言いつけに従って網を右側に投げると、魚が大量に獲れた。ペテルは主だと気づくと、彼のほうへ泳ぎだした。主が彼らに現れたのはこれが 3 度目で、主はパンと、炭火で焼いた魚を彼らに示された」。

光の歌 XI 「神的な復活の後、主はペテルに 3 度こう尋ねられた、〈わたしを愛するか？〉と。そしてペテルを、羊の群れの主たる牧者として立てられた。しかしペテルは、イエスが愛された弟子が自分の後からやって来るのを見ると、治め主にこう尋ねた。〈主よ、この人はどうなるのですか？〉主はこう答えた。〈もしわたしが再びやって来る時まで、彼が留まっていることを望んだとして、それがあなたに何の関わりがあるのか、ペテルよ！〉」。

ここでは、ひとまず「光の歌」で、ポルフェロゲネトスが「実体」という語彙を祈祷文の中に用いていることに注目しておきたい。そこにはアリストテレス的な語彙用法がうかがわれると言えようからである。

上で「復活週には朝課での福音朗読がなくなる」と記したが、次にその復活週における朝課の次第を記すことにしよう。この週には、次のように構造がかなり簡素化する。

開祭 先句 + 〈キリストは復活し〉 大連禱 復活カーノン - 歌 イパーコイ 復活カーノン - 歌 コン
ターク イコス 〈キリストの復活を目にして〉 復活カーノン ・ 歌 歌カタヴァスミア先句 復活カーノン 歌
前讃歌 復活カーノン 歌 「光の歌」 〈すべての霊は〉 讃美スティヒラ 「復活祭のスティヒラ」 三重連禱

同じく晩課も単純化する。

閉祭 先句+ <キリストは復活し> 大連禱 <主よあなたに向かって> <主よあなたに向かって>の後のスティヒラ <神の穏やかなる光> プロキメン(+福音書朗読) 三重連禱 完遂連禱 1個スティヒラ+「復活祭のスティヒラ」
XI大散会定式

なお、上に記した復活週朝課の「光の歌」は、「肉においては、われらの主にして王よ、死者として眠りにつきつつ、あなたは三日目に復活し、アダムを腐敗から呼び覚まし、死を打ち滅ぼされた。不死なる過ぎ越しよ、世の救いよ」というものであるが、これがポルフェロゲネトスによるものだとはいされていない。

さて復活週には、朝課で福音朗読がなくなるという興味深い現象だけでなく、「復活」という超自然的な事象を表現するために、さまざまな典礼式次第上の工夫が行われる。以下、その次第を紹介しよう。

まず上表には「復活カーノン」という部分が現れる。「カーノン」とは、ビザンティン典礼の朝課に特徴的な部分であり、旧新約聖書の9つの讃歌を基盤とし、各々で扱われるテーマに沿って、日々の性質に基づく観想により展開される詩連である。その原典は 出エジプト記 15.1 - 19 申命記 32.1 - 43 (通常用いられない) サムエル記上 2.1 - 10 ハバクク書 3.2 - 19 イザヤ書 26.9 - 20 ヨナ書 2.3 - 10 ダニエル書 3.26 - 56 ダニエル書 3.57 - 88 ルカ福音書 1.46 - 55 ; 68 - 79 であり、この「カーノン」はいわば「予型論の集大成」といった趣を有する。ちなみに、これらカーノンで取り上げられる9つの聖書詩歌については、早くから典礼において、このようにまとめたかたちで扱われることが定着していたことが知られる。それは、旧約聖書ギリシア語写本のうち5世紀に作成されたアレクサンドリア写本において、詩篇部分に続けてこの9つの歌が併載されていることから推察される(4世紀のヴァティカン写本とシナイ写本には併載されていない)。

この「カーノン」の様式が豊かに展開されたのは、7世紀ごろにおけるエルサレム東方のサヴァ修道院であり、その頂点に位置するのが「復活カーノン」である。そしてこの「復活カーノン」の作者は、ダマスコのヨハネ(676 - 780)であるとされる。以下にその「復活カーノン」を掲げよう。

1 「過ぎ越しは復活の日、それは主の過ぎ越し。われわれ民は光を受けよう、キリストわれらの神は、われわれを死から生命へ、地から天へ移された。われらは主の勝利を歌う」

「キリストは死者の中から復活した」「われらは思いを浄めよう、そして復活の近づきがたき光に輝くキリストを仰ごう、そして淨らかに聴こう、主がこう言われるのを。<喜べ!> われら、主の勝利を歌う者なれば」

「キリストは死者の中から復活した」「諸々の天は相応しく喜ぶがよい、大地は歡喜せよ。すべて目に見えまた目に見えざる世界は寿ぐがよい、キリストは復活された、永遠の喜びが」。

(カタヴァーシア)「過ぎ越しは復活の日、それは主の過ぎ越し。われわれ民は光を受けよう、キリストわれらの神は、われわれを死から生命へ、地から天へ移された。われらは主の勝利を歌う」

小連禱。司祭「繰り返して平安のうちに主に願おう」 信徒「主よ、憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける) 司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」「いと聖にして淨らか、いと祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ、あなたに」 司祭「權威、国、力そして栄光は、今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

3 「来たれ、新しい飲み物を飲もう。それは硬い岩から不思議なあり方で滴ったものではなく、キリストの墓からほとばしる不死性の泉。われらはここに力を得る」

「キリストは死者の中から復活した」「きょう、万物は光に満たされる。天、地、そして黄泉までも。被造物はすべて、キリストの復活を寿ぐがよい、主の復活に力を得て」

「キリストは死者の中から復活した」「キリストよ、昨日わたしはあなたとともに葬られた。きょう、蘇りであるあなたとともに、わたしは目覚める。昨日、わたしはあなたとともに十字架に付けられた。救い主よ、あなたの御国でわたしにも誉れを授けたまえ」
(カタヴァーシア)「来たれ、新しい飲み物を飲もう。それは硬い岩から不思議なあり方で滴ったものではなく、キリストの墓からほとばしる不死性の泉。われらはここに力を得る」

小連禱 (末尾) 司祭「あなたは善性に満ち人を愛する神、われらはあなたを讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」
信徒「アーメン」。

イパーコイ (第4調)「マーリアとともにいた女性たちは、朝まだきに家を出て、墓に置かれていた石が取り除けられているのを目にし、天使より次のような言葉を聞いた。永遠の光のうちにおられる方を、何故人間として、死者のうちに探すのか。墓での出来事を見て、急いで行って世に告げよ。主は死に打ち勝って復活した。まことに彼は、人類を救う神の子であるから」。

4「聖なる墓の見張り場に、きょう、神の預言者ハバククよ、われらとともに立て。そして光に瞬きつつ、明らかにわれらに告げる天使を指し示せ。<きょう、世の救いが訪れた。全能のキリストが復活された>」。

「キリストは死者の中から復活した」「おとめの胎を開く御子として、われらにキリストが現れた。彼は、人としてはきずなき小羊と名づけられ、神としてはまったく存在と呼ばれる。主は罪なきわれらのいとも浄らかなる過ぎ越しなれば」。

「キリストは死者の中から復活した」「主イエス、われらの祝された冠は、1歳の小羊として、われらすべてのために、自らを進んで犠牲とされた。それは和解の過ぎ越し。そして朱は、輝く真理の太陽として、墓より新たに光を放たれた」。

「キリストは死者の中から復活した」「神の父祖ダーヴィドは、証しの櫃の前で喜びのうちに踊った。しかしわれら神の聖なる民は、前表の成就を目にして、霊的に喜び祝う。キリストは復活された、万能の方が」。

(カタヴァーシア)「聖なる墓の見張り場に、きょう、神の預言者ハバククよ、われらとともに立て。そして光に瞬きつつ、明らかにわれらに告げる天使を指し示せ。<きょう、世の救いが訪れた。全能のキリストが復活された>」。

小連禱 (末尾) 司祭「あなたはわれらの神、われらはあなたを讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

5「われらは朝まだきに目覚め、バルサムのに代りに讃美の歌を主に向かって献げ、キリストにまみえよう。真理の太陽、永遠の生命をわれらすべてに注がれた方に」。

「キリストは死者の中から復活した」「キリストよ、あなたの尽きせぬ善性を目にして、黄泉の鎖に繋がれていた者たちは、喜びの足取りで光の世界に歩み出る、永遠の過ぎ越しをほめたたえつつ」。

「キリストは死者の中から復活した」「われらは天上の灯を手にも歩もう、墓より立ち上がられたキリストに向け、あたくも着飾った花婿のもとへと進むように。そして救いをもたらす神の過ぎ越しを、誉れを歌う天上の歌隊とともに寿ごう」。

(カタヴァーシア)「われらは朝まだきに目覚め、バルサムのに代りに讃美の歌を主に向かって献げてキリストにまみえよう。真理の太陽、永遠の生命をわれらすべてに注がれた方に」。

小連禱 (末尾) 司祭「あなたの名は聖にしてほめ讃えられ、いとも浄らかにしていと高きもの、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

6「キリストよ、あなたは地の底にまで降り、囚われ人を繋ぐ監獄の鍵を打ち砕いた。そして三日目に、魚の腹から蘇ったヨナのように、墓から復活された」。

「キリストは死者の中から復活した」「キリストよ、あなたは封印を見事に抜け、墓より復活された。ちょうど誕生の際にも、あなたは処女性の鍵を砕くことがなかったように。そして復活を通してわれらに楽園の扉を開かれた」。

「キリストは死者の中から復活した」「わが救い主よ、あなたは神として、まだ捧げられたことのない生ける犠牲として、自らを進んで父へと献げられた。そして墓より三日目に復活し、アダムをも、その民とともに蘇らせた」。

(カタヴァーシア)「キリストよ、あなたは地の底にまで降り、囚われ人を繋ぐ監獄の鍵を打ち砕いた。そして三日目に、魚の腹から蘇ったヨナのように、墓から復活された」。

小連禱（末尾）司祭「あなたは平安の王にしてわれらの霊の救い主、われらはあなたを讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

コンターク（第8調）「不死なる方よ、あなたは墓までも降られたが、黄泉の支配を打ち砕かれた。そしてあなたは、神なるキリストよ、勝利者として復活し、香油を携える女たちにこう言われた、＜喜びなさい＞。そして使徒たちに平和を賜り、打ちひしがれていた者たちを蘇らせた」。

イコス「日が昇る前、墓に宿った太陽を、香油を携えた女たちは朝まだきに探し、互いにこう言い合った。＜女たちよ！ 来て、生命を与える方の葬られた亡骸を、香油でぬぐおう＞。その体とは、死して墓に眠るアダムを蘇らせたもの。われらは急ぎ参じよう、東方の賢者たちのごとくに。そして主をあがめ、香油は贈り物として携え、塗るのではなく墓の脇に備えるものとしよう。そして涙をぬぐい、こう叫ぼう。＜おお治め主よ、立ち上がりたまえ。そして倒れていた者たちを立ち上がらせたまえ！＞」。 信徒「倒れていた者たちを立ち上がらせたまえ！」。

「シュナクサーリオン」:

「復活祭の聖にして偉大なる日曜日には、われらの主、われらの神にしてわれらの救い主、イエス・キリストによる生命を与える復活を記念する」。

司祭「**キリストの復活を目にし**、われらはただ一人罪なき主イエスを崇敬する。あなたの十字架の前に、われらはキリストにぬかずき、あなたの聖なる復活を歌い寿ぐ。あなたはわれらの聖なる神、あなたを措いてわれらは他のものを知らず、ただあなたの名を唱える。すべての信徒よ、来たれ。われらはキリストの聖なる復活に身をかがめよう。見よ、十字架を通じて全世界の喜びが到来する。絶えず神を祝しつつ、われらは主の復活を歌う。主は磔刑の苦難を忍び、死をもって死を打ち滅ぼした」。

信徒は同じ句を二度繰り返す。

司祭「**イエスは墓より復活された**、かつて述べられたように。われらに永遠の生命と平安、そして豊かな恵みを与えて」(第6調)。

信徒は同じ句を二度繰り返して歌う。

7「若者たちをかまどから救い出した方は、人の肉をまとい、死すべきものとして苦しみを受け、その苦難を通して、死すべき人間に不朽性の装いをまとわせた。彼こそただ一人祝された方、われらの師父の誉れある神」。

「**キリストは死者の中から復活した**」神を畏れる女性たちは、油を携えてあなたの許へと急ぐ。あなたを死したものとして、彼女たちは涙のうちに探した。しかしキリストよ、あなたは生ける神として喜びのうちに崇められ、神秘なる過ぎ越しとして、弟子たちに喜びをもって告げられる」。

「**キリストは死者の中から復活した**」われらは死に対する勝利を寿ぐ、黄泉の滅びを。それは第二の永遠なる生命のはじまり。われらは喜びのうちに、この恵みあふれる計らいをなした方を崇める。われらの師父たちにとって、唯一祝せられ、讃えられた神を」。

「**キリストは死者の中から復活した**」これは真にいと聖にして寿ぎに適う、救いの夜。復活の太陽が指し初める、前触れの光なれば。これこそ永遠の光、われらすべてのため、墓より肉をもって立ち上がられたもの」。

(カタヴァーシア)「若者たちをかまどから救い出した方は、人の肉をまとい、死すべきものとして苦しみを受け、その苦難を通して、死すべき人間に不朽性の装いをまとわせた。彼こそただ一人祝された方、われらの師父の誉れある神」。

小連禱（末尾）司祭「あなたの御国の支配は、常に祝され讃えられよ、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

8「きょうこそ類なく聖なる日、安息日の後の最初の日、祝日の中でも王たる卓越した祝日、祝祭のうちの祝祭。この日、われらはキリストを永遠にほめたたえる」。

「**キリストは死者の中から復活した**」来たれ、復活の証しの日に。ぶどうの木の新たな実りに与かるう、キリストの王国の神的な喜びに。彼を神として、永遠に讃えつつ」。

「**キリストは死者の中から復活した**」シオンよ、あなたの目を挙げよ、そして目にするがよい。見よ、あなたの子らはこぞってあなたの許に集う、神の光に照らされたものとして、西、北、南そして東から。そしてあなたのうちにキリストを永遠にほめ讃える」。

「聖なる三位にして、一なるわれらの神、あなたに栄光！」

「全能の父と御言葉と霊、三つなる位格にして一、あらゆる存在を超え、最も神的な一なる本性、われらはあなたの名において洗礼を

受け、あなたを永遠にあがめる」。

(先唱者)「われらは主を讃え、祝し、崇め、主を歌い、世々とこしえに主を誉め歌う」。

(カタヴァースィア)「きょうこそ類なく聖なる日、安息日の後の最初の日、祝日の中でも王たる卓越した祝日、祝祭のうちの祝祭。この日、われらはキリストを永遠にほめたたえる」。

小連祷 (末尾) 司祭「崇敬に値し、いと高きあなたの名は祝せられ、いと聖なるもの、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

司祭「神の母と光の母を歌でほめたたえよう」。

9 (先句)「天使は恩寵満ち満ちる方に叫ぶ。<いとも浄らかにして聖なるおとめよ、喜べ。繰り返して言う、喜べ。あなたの子は三日目に墓より復活した。そして死者たちを復活させた。あなたがたはともに祝うがよい」。

イルモス「光り輝け、天上のエルサレムよ。主の栄光があなたを覆った。さあ喜び祝うがよい、新しきシオンの山よ。浄らかなる神の母よ、喜びに満たされよ。あなたの子の復活のゆえに」。

「**キリストは死者の中から復活した**」キリストよ、あなたの言葉は、真に神的にして真に優しく、いと甘美。あなたはわれらにまごうことなく約束された、自らの言葉は世の終わりまでわれらとともにあると。われらは、この希望の実現をまったく信じて待ち望みつつ、喜び歌おう」。

「**キリストは死者の中から復活した**」おお、真に偉大にしていと聖なる過ぎ越し、キリストよ！ おお智恵、神の言葉そして力よ。どうかあなたのうちに、真に与かることを叶えさせたまえ。あなたの御国の蔭ることなき太陽に」。

(カタヴァースィア)「光り輝け、天上のエルサレムよ。主の栄光があなたを覆った。さあ喜び祝うがよい、新しきシオンの山よ。浄らかなる神の母よ、喜びに満たされよ。あなたの子の復活のゆえに」。

復活の主日の朝課、すなわち実際には聖土曜日の夜半から始まる復活徹夜祭は、一年の典礼の中で頂点に位置づけられるものであろうが、ビザンティン典礼ではこれを朝課の枠組みで行う(聖体礼儀とするローマ典礼とは意義づけが異なる)。そしてそれ以降一週間が「光の週」と呼ばれるわけであるが、その間の日々の朝課の次第は、基本的にこの復活徹夜祭と同様の構造を呈する。端的に言えば、この一週間はいわば「毎日が日曜日」と化し、曜日の交替が消滅する。そしてこの間毎日、カーノン部で歌われるのがこの「復活カーノン」なのである。

さて「光の週」には、その他朝課・晩課に関して興味深い特徴を呈する。まず、以下のような「復活祭のスティヒラ」(作者不詳)が朝課()と晩課()で唱和される。先句の部分は詩篇 67.2 - 3、117.24 である。

(司祭 先句1)「神よ立ち上がれ、その敵は散るがよい。神を忌む者らは、その御顔の前より走り去れ」。

信徒「聖性の過ぎ越しがきょう、われらに証しされた。新しい聖なる過ぎ越し、神秘に満ち、いとも浄らかなる過ぎ越しが。贖い主キリストこそ過ぎ越し、染みなき過ぎ越し、偉大なる過ぎ越し、信じる者たちの過ぎ越し、楽園の扉を開く過ぎ越し、すべての信徒を聖化する過ぎ越し」。

(司祭 先句2)「霧が失せるように、姿を消すがよい。蠟が火の前に溶け去るように」。

信徒「来たれ、誉れある光景を告げ知らせる女性たちよ、シオンにこう告げるがよい。<われらより、キリストの復活の喜ばしき知らせを聞きなさい。エルサレムよ、喜び踊れ、歡喜せよ。王たるキリストが、着飾った花婿のごとくに墓から立ち上がられるのを見たのだから>」。

(司祭 先句3)「そのように、罪ある者らは神の眼前に滅び、正しき者たちは喜ぶがよい！」

信徒「油を携える女性たちは、朝まだきに生命を与える方の墓に着き、天使が墓石の上に座っているのを見た。天使は彼女らにこう言った。<生ける方をなぜ死者たちのうちに探すのか。虚無には帰しえぬ方を、なぜ虚無のうちに求めて嘆くのか。さあ行って、主の弟子たちにこのことを告げよ！>」。

(司祭 先句4)「この日は神が創られた日。ともに喜び祝おう！」

信徒「麗しき過ぎ越し、主の過ぎ越し、過ぎ越し！ 最も浄らかなる過ぎ越しがきょう、われらに明らかにされた。過ぎ越しだ、互いに喜びをもって愛しあおう！ おお過ぎ越し、悲しみの変容！ きょう墓より、あたかも館より出でるかのよう、キリストが輝き出で、女性たちを喜びで満たし、彼女らにこう言われた。〈このことを使徒たちに告げよ！〉」。

(司祭 先句5)「栄光は父と子と聖霊に。今もいつも世々とこしえに。アーメン」

信徒「復活の日、われらはこの日を寿ぎ祝い、あたかも兄弟のごとく、互いに愛し合おう。復活をもって、われらの敵をも赦そう。そしてこう歌おう」。

「キリストは死者の中から復活し、死をもって死を打ち滅ぼし、墓の中にいる者たちに生命を賜った」

この「復活祭のスティヒラ」が用いられる背景には、ビザンティン典礼特有の「8調」なるシステムがあり、この解説も欠かすことはできない。そしてこの「8調」システムの創始者も、上述したダマスコのヨハネだとされる。これは聖週間と、復活祭から翌日曜日までの「光の週」を除き、基調となる8つの調べを順に各週に配し、復活祭翌週の「トマスの主日」を第1調として年間を貫く歌調システムで、教会が天上界のかたどりでであることを表現したものである。

それぞれの祈祷文は、8調のうちのどの調で歌うかが定められ、晩課・朝課の各々の部分に配される。以下、本報告に関わる祈祷文について訳出してみよう。

〔第1調〕

〔土曜日晚課スティヒラ〕(cf. 7)

1「われらの夕の祈りを、聖なる主よ、受け入れたまえ。そしてわれらの罪の赦しを与えたまえ。あなたは復活をわれらに明らかにされた」。

2「民よ、シオンを求めよ。その城壁を取り囲め。そこで死者の中から復活した救い主を讃えよ。彼はわれらの神、われらを罪から贖う方！」。

3「おお民よ。来たれ。われらは歌い、キリストを熱心に崇めよう。その死者からの復活を讃えて。彼はわれらの神、世界を悪の欺きから救われた方！」

4「天よ喜べ、地の礎よ響め、山の頂よ、踊るがよい。見よ、エンマヌエルがわれらの罪を十字架に釘付けとし、死を打ち滅ぼしてわれらに生命を与えられた。そして主は、人を愛する方として、アーダームをその墓からよみがえらせた」。

5「肉においては十字架に自らの意志で付けられ、苦しみを経て葬られ、死者のなかから復活した救い主をわれらは歌う。こう叫びながら。〈キリストよ、真なる信のうちにあなたの教会を強めたまえ。そして善性に満ち人を愛する方として、われらに平安なる生命を与えたまえ〉」。

6「生命を付与するあなたの墓の前に、われらは相応しからずも立ち、あなたの言葉に尽せぬ恵み深さを讃える、われらの神なるキリストよ！ あなたは罪なきままに十字架と死を担い、人を愛する方として、世に復活を賜った」。

「栄光は」「御父と同様に初めを持たず、御父と等しく永遠の生命をもつ御言葉は、表現しつくせぬ仕方、おとめの体より肉を自らに受け、われらのために自ら十字架上の死を耐え忍び、栄光を帯びて復活された。われらはこう叫びつつ歌う。〈生命を与えるわれらの主、われらの霊の救い主よ、あなたに栄光！〉」。

「今も」「人類から芽吹いたこの世の栄光、神の母、天の門、天使らの誉れにして信徒らの誇りなるおとめマリアを、われらは歌う。なぜなら彼女は神性の天にして幕屋となったのだから。聖母はいにしへの敵意を打ち砕き、われらに平安をもたらし、われらの前に天の王国を開かれた。信は彼女のうちに力を獲得し、かつ彼女より生まれたわれらの主において、われらの守り。だから、あなたがたは委ねるがよい、神の民よ、委ねよ。なぜなら聖母は、力に満ち溢れる方として敵意に打ち勝ったのだから」。

〔土曜日晚課先句スティヒラ〕(cf. 13)

1「あなたの受難によって、キリストよ、われらは苦難より解放された。あなたの復活によって、われらは腐敗からのがれた。主よ、あなたに栄光！」

〔主日朝課讃美のスティヒラ〕(cf. 30)

1「キリストよ、われらは救いをもたらすあなたの受難を歌おう。そしてあなたの復活を誉めたたえる」

2「あなたは十字架を耐え忍び、死の力を打ち砕き、死者のうちから復活し、力に満ちた方として、われらの生を慰めたまえ」。

3「復活によって黄泉の力を打ち砕き、人を復活させた方、われらの神なるキリストよ、われらを相応しい者となさせたまえ、浄ら

かな心であなたを歌い、ほめたたえることができるように」

4「あなたの神的な現れをほめたたえつつ、われらはあなたを歌う、キリストよ。あなたはおとめより生まれ、父と変わることはない。あなたは人として苦しみを受け、自ら十字架を背負った。そしてあたかも輝く館より進み出るかのように、世を救うために墓より復活された。主よ、あなたに栄光！」

〔第2調〕

〔土曜日晚課スティヒラ〕

1「来たれ、拝もう。父より永遠の昔に生まれ、おとめマリアより肉を受けた御言葉。この方は自ら十字架の苦しみを受け、埋葬へと自らを委ねたのち、死者たちのうちから復活した。道を見失った者として、われらを救いたまえ」。

2「キリスト、われらの救い主、あなたはわれらに定められた罪状書きを十字架に釘付けとして無効とし、死の支配を打ち滅ぼした。われらは彼の三日目なる復活を讃える」。

3「大天使らよ。われらはキリストの復活を歌う。彼はわれらの霊の贖い主にして救い主。主は大いなる栄光を伴い、力を帯びて、再びこの世を、自ら創られたこの世を裁くために来られる」。

4「十字架に付けられ、葬られた治め主なるあなたを、天使は婦人たちにこう言って告げ知らせた。〈来て、見るがよい。主が葬られた場所を。主はあらかじめ告げておられたように、力強く復活された〉。それゆえわれらはあなたを、唯一不死なる方として拝む。生命を与えるキリストよ、われらを憐れみたまえ」。

5「あなたは十字架をもって、果実の木に由来する呪いを滅ぼし、墓を通して死の支配を覆し、復活を通して人類を照らされた。それゆえわれらはあなたに叫ぶ。〈キリスト、善性あふれるわれらの神よ、あなたに栄光！〉」。

6「主よ、あなたの前に、死の門は畏れをもって開かれ、黄泉の門番はあなたの姿を目にして、恐怖に陥る。あなたは地獄の扉を打ち砕き、鉄の鍵を無用とし、われらを闇と死の悲しみから引き出し、われらの桎梏を解き放たれた」。

「栄光は」「救いの歌を歌いつつ、われらはこう声を挙げる。〈来たれ、皆の者、主の家にあって膝をかがめ、こう言おう。「十字架に付けられ、死者のうちから復活し、父のふところに住まう方よ、われらを罪から浄めたまえ」と〉」。

「今も」「悲しみの律法は過ぎ去り、恵みの掟が到来した。ちょうど、燃える芝が燃えながらも燃え尽きないように、あなたもまた、おとめとして出産しつつおとめのまま留まり、燃える柱の代わりに真の太陽がわれらに輝き出で、モーセに代わってキリストが、われらの霊の救いとして現れた」。

〔土曜日晚課先句スティヒラ〕

1「われらの救い主キリストよ、あなたはその復活を通して、万物をすべて照らし、あなたの被造物を立て直された。全能の主よ、あなたに栄光！」。

〔主日朝課讃美のスティヒラ〕

1「主よ、すべての霊とすべての被造物はあなたを讃える。あなたは十字架を通して死を打ち滅ぼし、人類に、死者のうちからの自らの復活を示された。唯一人を愛する方として」。

2「ユダヤ人たちをして語らしめよ。〈見張りの男たちがわれらの王を隠してしまった〉と。なにゆえ、墓石が生命の岩を留めおけようか。むしろあなた方は、死者を差し出すのか、もしくは復活された方に対し、われらとともにこう祈るのか。〈救い主よ、あなたの憐れみの大きさに栄光あれ。あなたに栄光〉」。

3「民は喜び、踊るがよい。墓石の上に座っていた天使がわれらの前に姿を現し、こう言った。〈キリスト、世界の救い主は、死者たちのうちから復活し、すべての者たちを芳香で包んだ。民は喜び、踊るがよい！〉」。

4「主よ、天使はあなたが懐胎される前に、恩寵に満たされた方に祝辞をもたらした。天使は、あなたの復活に際しては、誉れあるあなたの墓から石を転がしもした。大きな哀しみに代えて喜びの姿を告げ知らせた。これはすなわち、死に代えて生命を与える治め主を讃えること。それゆえわれらもあなたに叫ぶ。われらすべてに幸いをもたらす方、われらの主、あなたに栄光」。

〔第3調〕

〔土曜日晚課スティヒラ〕

1「救い主なるキリストよ、あなたの十字架によって死の支配は打ち砕かれ、悪魔の偽りはついえた。信を通して、人の種は歌をもて途絶えることなくあなたを讃える」。

2「主よ、あなたの復活を通して万物は照らされ、楽園は再び開かれ、すべての被造物はあなたを讃え、あなたに讃美の歌を捧げる」。

3「わたしは父と子の力を讃美し、聖霊の支配を歌いあげる。分かれずして創られざる神性、一体なる聖三位一体を。その方は世々としえに治められる」。

4「キリストよ、われらはあなたの尊い十字架の許に駆け寄り。そしてあなたの復活を歌い、讃美する。われらはすべて、あなたの傷を通じて癒されたのだから」。

5「わたしは、おとめより肉を取った救い主を歌う。主はわれらのために十字架につけられ、三日目に復活し、われらに豊かな恵みを与えられた」。

6「黄泉に住む者たちに、そこまで降りて来られたキリストは告げ知らせる。＜わたしを信じよ。いま、わたしは勝利をおさめた。わたしは復活であり、あなたがたを断罪より救い出し、死の門を打ち砕く＞」。

「栄光は」「浄らかなるあなたの家の前に、われらは相応しからずも立ち、夕べの歌を、われらの神なるキリストに歌う、心の深みよりこう叫んで。＜三日目の復活によって、あなたは世を照らされた。人を愛する方よ、あなたの民を、あなたに刃向かう者の手から守りたまえ！＞」。

「今も」「浄らかなるおとめよ、神の起源を持つあなたの出産に関して、われらはどうして驚嘆せずにいられようか？ おお染みなきおとめよ、あなたは人の類の誘惑を受け入れることなく、父なくして肉において御子を出産された。御子は母なくして、永遠の昔に御父より生まれた方。しかし、変化なく、混合なく、分かたれることもなく、二つの本性の特質をまったくままたまに留めておられる。それゆえわれらの王妃、おとめなる母よ、われらの霊の救いのために、主に祈りたまえ。われらあなたをまったく信じて＜神の母＞と告白する者なれば」。

〔土曜日晚課先句スティヒラ〕

1「キリストよ、あなたはその受難を通して太陽を暗くし、復活の光をもって万物を照らした。人を愛する方として、われらの夕べの歌を受け取りたまえ」。

〔主日朝課讃美のスティヒラ〕

1「すべての民よ、来たれ。恐るべき秘義の力を理解するがよい。われらの救い主キリスト、初めにあつて御言葉なる方が、われらのために十字架に付けられ、意志により葬られ、死者のうちから復活された、われらを救うために。それゆえわれらは彼を崇める」

2「主よ、いにしえの者たちはあらゆる奇跡を語った。しかし不信なる者たちの集いは、贈り物をもって彼らを買収し、あなたの復活を秘すようにさせた。世はその復活を讃える。主よ、われらを憐れみたまえ」

3「あなたの復活の知らせを受け、万物は喜びに満たされる。マリア・マグドルナは墓に着くと、光り輝く天使が墓石の上に座っているのを目にした。天使は彼女に語りかけ、こう言った。生ける方を死者たちの間に何故探すのか？ かつて語っておられたように、主はあなた方に先んじてガリレアにおられる」

4「人を愛する治め主よ、われらはあなたのまばゆさにおいて光を見る。あなたは死者のうちから復活し、人類に救いをもたらす。すべての被造物はあなたを、唯一罪なき方として讃える。われらを憐れみたまえ」。

〔第4調〕

〔土曜日晚課スティヒラ〕

1「われらの神なるキリストよ、あなたの生命を与える十字架に対し、休むことなくぬかずきつつ、われらはあなたの三日目なる復活をほめたたえる。この復活を通して、万能なる方よ、あなたは腐敗していたわれら人間の本性を新たにし、われらに天上界への通交を切り拓かれた、唯一人祝され人を愛する方として」。

2「わが救い主は、和解の木により、裁きをなくされた。なぜなら全能の主よ、あなたは自ら十字架の木に付けられ、黄泉に降ってその鎖を打ち砕かれたのだ。それゆえわれらはあなたの死者からの復活をたたえ、喜びをもってこう叫ぶ。＜全能なるわれらの主よ、あなたに栄光！＞」。

3「主よ、あなたは黄泉の門を打ち破り、自らの死をもって死の王国を打ち砕いて、人類を破滅から解放された。世に生命と豊かな恵みを賜って」。

4「民よ来たれ、救い主の三日目なる復活を歌おう。それを通してわれらは黄泉の打ち勝ちがたき桎梏から解放され、不滅性と生命を獲得した。皆うちそろってこう叫ぼう。＜十字架に付けられ、葬られ、復活された方よ、あなたの復活を通してわれらを救いたまえ、唯一人を愛する方として＞」。

5「救い主よ、天使と人間たちはあなたの三日目なる復活を讃える。この復活を通じて、大地はすべての果てまで照らされ、われらは敵への奉仕から解放された。われらはこう叫ぶ。＜あなたの復活を通して、われらを救いたまえ、唯一人を愛する方として＞」。

6「われらの神キリストよ、あなたは地獄の門を打ち破り、虚無を亡きものとし、倒れていた人類を立ち上がらせた、それゆえわれらは声を一つにしてこう述べる。〈死者のうちから復活した方、主よ、あなたに栄光！〉」

「栄光は」「主よ、父よりのあなたの誕生はあらゆる時間に先立ち永遠、おとめよりなされたあなたの受肉は言葉に尽しようもなく、人智を超えて理解しがたい。黄泉へのあなたの降下は、悪魔とその宣揚者には驚くべきこと、なぜならあなたは死を打ち滅ぼし、三日目なる復活によって、虚無からの復興と豊かな恵みを与えた」。

「今も」「神にもまごう預言者ダーヴィドは、あなたについて、あなたを高きものとする神に語りかけ、歌の中でこう述べた。〈王妃はあなたの右の座に立つ〉。あなたから父なく生まれることを受諾された神は、あなたを生命の母また執り成し手として選んだ。こうして主は、罪によって破滅に陥った神の像を新たにし、失われた羊の群れを探し出し、その肩に担ぎ、父の許に戻し、天の力をもって一つにし、力あり豊かな恵みを垂れる方として、世を救われる」。

〔土曜日晚課先句スティヒラ〕

1「主よ、あなたは十字架に昇り、いにしへの呪いを滅ぼし、黄泉に降って、永遠の桎梏に定められていた者たちを解放し、人類に不死性を賜った。それゆえわれらは歌をもって讃える、生命を与え、救いをもたらすあなたの復活を」。

〔主日朝課讃美のスティヒラ〕

1「われらの全能なる主よ、あなたは十字架と死を耐え忍び、死者のうちから復活された。われらはあなたの復活を讃える」。

2「キリストよ、あなたは自らの十字架を通して、いにしへの呪いからわれらを解放し、自らの死をもって、われらの人性を苛む悪魔より救い出し、自らの復活をもって万人を喜びで満たされた。それゆえわれらはあなたにこう叫ぶ。〈死者のうちより復活したわれらの主よ、あなたに栄光！〉」。

3「われらの救い主キリストよ、どうかあなたの十字架をもって、われらをあなたの真理に向けて教え導きたまえ。そしてわれらを敵の網より救い出し、死者のうちより復活して、われらをも立ち上がらせたまえ。われらは罪ゆえに倒れた。どうかわれらに向けてあなたの御手を広げたまえ、人を愛するわれらの主よ、聖なる者たちの祈りをによりて」。

4「わが救い主よ、あなたは肉において死を蒙った、それはわれらに不死性を備えるため。あなたは墓に住まわれた、それはわれらを墓より救い出し、自らとともに復活させるため。あなたは人として苦しんだが、神として復活された。それゆえにこそ、われらはこう叫びを挙げる。〈生命を与えるわれらの主よ、唯一人を愛する方よ、あなたに栄光！〉」

〔第5調〕

〔土曜日晚課スティヒラ〕

1「キリストよ、あなたはその貴い十字架によって、悪魔を恥じ入らせ、自らの復活を通して罪の刺を鈍らせて、われらを死の門から救い出してください。それゆえ神のひとり子よ、われらはあなたを讃える」。

2「人類に復活を賜った方は、小羊のごとくに屠り場へと引かれていった。彼を前にして黄泉の公は震撼し、艱難の門は開く。なぜならそこに、栄光の王、キリストが入るため。キリストはこう言う、鎖につながれた者たちには〈解き放たれよ〉、そして闇のうちに住める者たちには〈永遠の闇より解放されよ〉と」。

3「すばらしき奇跡！ 目に見ることのできない業の創り主が、人間への愛ゆえに肉の上で苦しみ、不死なる者として復活された。来たれ、すべての代に生まれた者たちよ、主を崇めよう。主の恵み深さにより悪魔の冷笑より解放されて、われらは三つの位格における一なる神を讃めたたえる」。

4「決して翳ることのない光よ！ われらはあなたに夕べの祈りを献げる。あなたは時が満ちると肉を取って世に輝き出で、黄泉にまで完全に降り、そこに見出される闇を散らし、諸国の民に復活の光を示された。恵み深き主よ、あなたに栄光！」

5「われらはキリストを、われらの救いのもたらし手を讃える。主の復活によって世は欺瞞から解放された。天使の群れは喜び、悪霊の冷笑は逃げ去り、倒れていたアーダームは起き上がり、悪魔は消え去った」。

6「警護に当たっていた者たちに、律法に悖る者どもはこう指示した。〈キリストの復活を秘密にせよ。財布を見せてこう言うのだ、《われわれが眠っている間に、墓から遺体が盗まれたのだ！》と〉。誰が見たことだろう、誰が聞いたことだろう、かつて、それも香油を塗られ裸のままの死者を、墓には葬衣を残したまま盗んでいくなどということ？ ユダヤ人たちよ、児らを偽ってはいならない。預言者たちの言葉をよく調べてみるがよい。そしてよく理解せよ、彼が万能の、真なる世の贖い主であるということを」。

「栄光は」「主よ、あなたは黄泉を屈服させ、死を打ち砕いた。あなたは尊いその十字架をもって世を照らされた。甘美なる主よ、われらを憐れみたまえ！」。

「今も」「紅海はかつて、染みなき許婚の姿を描き出した。その時そこにいたのは水を二つに分かったモーゼシュ、今ここにいるの

は奇跡の完遂者たる大天使ガーボル。その折、イスラエルは深みを洩いた足で渡り終え、いまやおとめが種なくしてキリストを産む。海はイスラエルの渡河以降、往来ができなくなったが、染みなきおとめは、エンマヌエルを出産した後も傷を受けることなく留まった。現存し、かつ永遠の昔より存在する主よ、あなたは人として現れた。どうかわれらを憐れみたまえ。

〔土曜日晚課先句スティヒラ〕

1 「肉を取った方、天を去ることのない救い主よ、あなたをキリストとして、われらは歌声もて崇める。あなたは人の種のために、十字架と死とを肯われた。人を愛する方として、われらの主よ、黄泉の門を打ち壊し、あなたは三日目に復活された。われらの霊を救って」。

〔主日朝課讃美のスティヒラ〕

1 「主よ、悪しき者どもによって封印された墓より、あなたはまったき姿で出で立った、ちょうどおとめより生まれたときのごとくに。肉体を持たぬ天使たちは、あなたの受肉の神秘を捉えきることにはできない。あなたの墓を守る兵士らも、あなたの復活の秘密を理解することにはできない。どちらの出来事も、疑う者どもには神秘のまま留まる。しかし神秘の前に信をもって頭を垂れる者たちには、明らかにして明白な驚くべき業。われらの救い主よ、その力をもって、あなたに歌を捧げる者たちに喜びと豊かな恵みを与えたまえ」。

2 「主よ、あなたは永遠の鍵を破壊し、足かせを打ち壊した。あなたは墓より復活し、葬礼のための衣を、三日間に及んだあなたの葬りの証拠として脱ぎ捨て、先んじてガリレアに赴いた。あなたを岩の墓に閉じ込めようと、それは無益なこと。捉えきることのできない救い主よ、あなたの恵みは偉大、われらを憐れみ、救いたまえ」。

3 「主よ、婦人たちはあなたの墓に向かって急ぐ、われらのために苦しまれたキリストを見ようと願って。そして着いてみると、転がされた墓石に天使が座っているのを見つけた。天使は彼女たちに向かってこう言った。〈主は復活された！ あなたがたは弟子たちにこう告げなさい、《主は死者のうちから復活し、われらの霊を救われた》と〉」。

4 「主よ、あなたは、封印された墓より立ち上がられたのとちょうど同じように、閉ざされた扉を通り抜けて弟子たちの間に進み来られた、肉体にできた受難の徴を彼らに示しつつ。救い主よ、それらの徴は、長きにわたるあなたの忍耐によって、自ら帯びられたもの。あなたはダビドの裔として傷を帯び、神の御子として世を贖われた。あなたの恵みは偉大、捉え尽くすことのできない救い主よ、われらを憐れみ、われらを救いたまえ」。

〔第6調〕

〔土曜日晚課スティヒラ〕

1 「キリストは黄泉の上に勝利をおさめ、十字架に昇って、死の闇に座せる者たちを自ら復活させた。あなたは死を免れた方。あなたは、自らの光をもって生命を注がれた。万能の救い主よ、われらを憐れみたまえ」。

2 「きょう、キリストは死を打ち砕き、仰せのとおり復活して、世に喜びをもたらした。われらはすべて声を挙げて、こう歌う。〈おお、生命の泉よ、近づきがたき光よ、万能の救い主よ、われらを憐れみたまえ〉」。

3 「いかなるところにもおられるあなたの御顔を前にして、われら罪人はどこに逃れよう？ 天にはあなた自らがおられ、黄泉であなたは死を打ち砕かれた。あるいは海の深みに逃れようか？ ここにも、治め主よ、あなたの御手の徴がある。われらはあなたの許に逃れ、あなたの前に身を屈め、こう祈ろう。〈死者のうちより復活された方よ、われらを憐れみたまえ〉」。

4 「キリストよ、われらはあなたの十字架を誇りとし、あなたの復活を歌い、讃える。あなたこそわれらの神、あなたをにおいての神を、われらは知らない」。

5 「われらは常に主を祝し、主の復活を歌う。主は十字架を耐え忍び、死をもって死を滅ぼした」。

6 「主よ、あなたの力に栄光あれ。あなたは死の支配の力に打ち勝ち、十字架を通してわれらを新たにされた。われらに生命と永遠の安寧を賜って」。

「栄光は」「主よ、あなたの葬りは、黄泉の鎖を解き放ち、打ち砕いた。そしてあなたは死者からの復活によって、世を照らされた。われらの主よ、あなたに栄光！」。

「今も」「おお、浄らかなるおとめよ、誰があなたを祝さずにいられようか？ あなたのいと浄らかなる出産を、誰が讃えずにいられようか？ 御父から永遠の昔より甦した御一人子は、理解しつくせぬ仕方て肉を受け、あなたより生まれた。主は神的本性を保持したまま、同時に人間の本性をも帯びた。われらは彼を、分かれた二つの位格とは告白せず、むしろ互いに混じり合うことなき二つの本性の主だと認識する。浄らかなる幸いなおとめよ、主に祈りたまえ、われらの霊を憐れみたまえと」。

〔土曜日晚課先句スティヒラ〕

1 「われらの救い主なるキリストよ、あなたの復活を、天上にて天使らは歌う。どうかこの世にあって、われらもまた、浄らかな心

もてあなたを歌い、讃えさせたまえ」。

〔主日朝課讃美のスティヒラ〕

1 「主よ、あなたの十字架はあなたの民の生命にして復活。われらはそのうちに希望を置きつつ、あなたをわれらの復活した神として歌う。われらを憐れみたまえ」。

2 「われらの治め主よ、あなたの埋葬は人類に楽園を拓き、われらは腐敗より解放されて、あなたを、復活した神として歌う。われらを憐れみたまえ」。

3 「御父、聖霊とともに、われらは死者のうちより復活されたキリストを歌う、こう叫びを挙げながら。〈あなたはわれらの生命にして、われらの復活。われらを憐れみたまえ〉と」。

4 「キリストよ、あなたは書に記されたとおり、三日目に復活し、古の師父たちをもよみがえらせた。それゆえ人類はあなたを讃美し、あなたの復活を讃めたたえる」。

〔第7調〕(参考まで)

〔土曜日晚課スティヒラ〕

1 「来たれ、われらは主にあって喜ぼう。主は死の猛威を打ち砕き、人類に光を与えた。われらは天使らとともにこう叫ぶ。〈われらの創り主にして救い主よ、あなたに栄光！〉」。

2 「救い主よ、あなたは十字架と葬りとをわれらのために耐え忍び、神として、死をもって死に打ち勝った。それゆえわれらは、あなたの三日目なる復活に頭を垂れる。主よ、あなたに栄光！」。

3 「使徒たちは創り主の復活を目にして驚嘆し、天使たちは讃美を声高らかに宣べる。〈この栄光は母にして聖なる教会のもの、この豊かさは天国のもの〉。主よ、あなたはわれらのために苦しまれた、あなたに栄光！」。

4 「キリストよ、あなたは悪しき子どもに囚われる身となったが、あなたこそわが神、わたしはあなたを恥としない。あなたは鞭打たれたが、わたしはあなたを否まない。あなたは十字架に付けられたが、わたしはそれを秘密とはしない。わたしは常にあなたの十字架を誇る。あなたの死はわたしの生命、万能にして人を愛する主よ、あなたに栄光」。

5 「キリストはダーヴィドの予言を満たそうと欲して、シオンの山にて彼に相応しき崇高さを弟子たちに明らかに示し、御父および聖霊とともに常に讃えられ崇敬さるべき本性として自らを開示し、初めは肉を伴わぬ御言葉として、最後にはわれらのために肉を取り苦難を被る人としてわれらにその姿を示し、人を愛する方として、自らの力をもって復活された」。

6 「キリストよ、あなたは自ら望むままに黄泉に降り、神また治め主として死を打ち滅ぼし、三日目に復活して、アーダームをもしと虚無の鎖から解き蘇らせた。アーダームはあなたに向かい、こう叫んで述べる。〈唯一人を愛する方よ、あなたの復活に栄光！〉」。

「栄光は」「われらの主よ、あなたは眠れる者として墓に収められたが、その力において満ち溢れ、三日目に復活された。そして自らとともにアーダームをも、万能の神として死の腐敗より立ち上がらせた」。

「今も」「おお神の母よ、あなたは母の身分を、自然の秩序を越えて知り、しかも処女に留められた、知性をも言葉をも超えた仕方。そしてあなたの出産の不思議さは、舌が語りつくすことはできない。おお浄らかなる方よ、あなたの懐妊は栄光に満ち、その出産も理解を超える。神は望まれるところで、自然本性的な秩序に打ち勝つことができる。それゆえにこそ、われらはすべて、あなたを神の母と認め、篤き心をもってあなたに願う。われらの霊の救いのために祈りたまえ」。

〔土曜日晚課先句スティヒラ〕

1 「世の救い主よ、あなたは墓より復活し、自らの肉体とともに人の種を復活させた。主よ、あなたに栄光！」

〔主日朝課讃美のスティヒラ〕

1 「キリストは死者のうちから復活し、死の縛めを解き放ち、世に大いなる喜びを告げ知らせた。天よ、神の栄光を歌うがよい」。

2 「キリストの復活を目にして、われらは聖なるわれらが主をあがめる。唯一罪を免れた方として」。

3 「われらはキリストの復活を崇敬することを止めない。主はわれらの悪よりわれらを救い出してくださった。キリストよ、われらの聖なる主よ、あなたはわれらのために、復活を公けにして下さった」。

4 「主がわれらに下さった恩に、どのようにして感謝を表そうか。われらのため、腐敗に陥ったわれら人類の本性的なために、御言葉は肉となり、われらのうちに住まわれた。主は、感謝を知らぬ者たちへの慈善者、囚われの身にある者たちの解放者、闇に座せる者たちにとっての真理の太陽となられた。十字架には和解があり、黄泉には光がある。死には生命があり、倒れていた者たちには復活があり、主に向かってわれらはこう叫びを挙げる。〈われらの神よ、あなたに栄光！〉」。

〔第8調〕

〔土曜日晚課スティヒラ〕

1 「キリストよ、われらは夕べの歌を歌い、知的な奉仕をあなたに捧げる。あなたは自らの復活を通して、恵み深くわれらを憐れんで下さった」。

2 「主よ、主よ！ われらをあなたの御顔の前から遠ざけず、恵み深くわれらを憐れみたまえ、あなたの輝かしき復活を通して」。

3 「聖なるシオンよ、教会の母、神の幕屋よ、喜べ。あなたは復活によって、罪の赦しをまず最初に受け取った」。

4 「御父より永遠の昔に生まれた神の御言葉は、時が満ちると染みなきおとめより肉を受け、自ら十字架と死とを耐え忍ばれた。そしていにしえより死のために苦しめられていた人間を、復活によって救った」。

5 「キリストよ、われらは死者の中からの復活を讃える。あなたは復活をもってアダムの子を黄泉の責め苦より救い出し、神として、世に永遠の生命と豊かな恵みを賜った」。

6 「われらの救い主なるキリスト、神の御一人子よ、あなたに栄光あれ！ あなたは十字架に釘付けとされ、三日目に墓より復活された」。

「栄光は」「主よ、われらはあなたを讃える。あなたはわれらのために、自ら十字架刑を耐え忍んだ。万能の救い主よ、われらはあなたを崇める。どうかわれらをあなたの御顔の前より遠ざけたもうな。むしろ、おお人を愛する方よ、われらに耳を傾け、あなたの復活によってわれらを救いたまえ」。

「今も」「天の王は人間への愛により地に降り、人の間に住まわれた。あなたは浄らかなるおとめより肉を受け、かくも不思議なる神性を帯びて、彼女より生まれた。御子は一人、二つの本性を持ち、しかも二つの位格ではない。それゆえわれらの主なるキリストを、われらは完全なる神にして完全なる人と真に告白し、告げ知らせる。おお、咎なき母よ、主に執り成したまえ、われらの霊を救いたまえと」。

〔土曜日晚課先句スティヒラ〕

1 「天より降られたあなたは、十字架に昇り、不死なる生命であるあなたは、死へと赴かれた。真なる光であるあなたは、闇に横たわる者たちの許を訪ね、われらすべての復活であるあなたは、倒れていた者たちを訪れた。あなたは光をもたらす方にして救い主、あなたに栄光！」

〔主日朝課讃美のスティヒラ〕

1 「主よ、あなたは裁きの座の前に立ち、ピラートに裁かれるとはいえ、御父とともに座す王の座を去ったわけではない。そして死者のうちからの復活によって、世を悪魔の桎梏から解放された、憐れみ深く人を愛する方として」。

2 「主よ、あなたは悪魔の嫉みに抗して武装し、われらに十字架を賜った。悪魔は十字架に身震いし、震撼して、その力にあえて目を向けることができない。十字架こそ、死者たちを蘇らせ、死を無に帰さしめるもの。それゆえわれらは、あなたの葬りと復活とを崇敬する」。

3 「主よ、ユダヤ人たちは、あなたを死した者として墓に収めたが、立ち上がる王として兵士らは守りを固め、生命の宝庫として封印もて見張る。それにもかかわらず、あなたは復活し、永遠の生命をわれらの霊に賜った」。

4 「主よ、あなたの天使は、復活を告げ知らせつつ、墓守たちを震撼させた。だが婦人たちには、見よ、次のような言葉をかけた。〈あなた方は、生ける方をなぜ死者のうちに探すのか。主は神として復活し、世に生命を賜った〉」。

上に掲げたのは土曜晩課で歌われる 〈主よあなたに向かって〉の後のスティヒラ、土曜先句スティヒラ、および主日朝課で歌われる 讃美のスティヒラ、の第1調から第8調までの歌詞である。

まず主日朝課では30の「讃美スティヒラ」で8個スティヒラが歌われるが、その前半4つに関して、光の週には下表左欄のように曜日により調を順に変えながらスティヒラを選ぶ()。後半4個分は「復活祭のスティヒラ」である。前半についてその次第は、復活徹夜祭では第1調、以下2, 3, 4, 5, 6, そして復活の土曜日の朝課では(一週間は7日しかないため)第8調を用いる。そして翌日の「トマスの主日」から年間のサイクルが始まり、第1調に戻るのである。

次に「光の週」の晩課では〈主よあなたに向かって〉の後のスティヒラ()として6つが歌われるが、その次第は、復活主日当日の晩課が普段の主日前晩課の第2調となり、以下3, 4, 5, 6, 8調が用いられる。また「先句スティヒラ」()では朝課と同様に「復活祭のスティヒラ」が歌われるのであるが、その前に毎日一個ずつ主日前晩課の「先句スティヒラ」が採られる。その次第は順

に2, 3, 4, 5, 6, 8調である。なお聖土曜日の晩課は聖バジル典礼と合体した形で行われ、したがって後半部分が切り取られているため、晩課前半に該当する<主よあなたに向かって>の後のスティヒラだけが歌われることになるが、その際、当該日固有の祈禱文によるスティヒラの前に、主日前晩課の第1調から3ヶ、先句スティヒラから1ヶを採る。こうして聖土曜日晚には、すでに復活がほの見えるような構造をビザンティン典礼は採っている。以上を図示すると次のようになる。

	朝課〔讚美スティヒラ〕	晩課〔<主よあなたに>後〕〔先句スティヒラ〕	
聖土曜		土晩 1×3 + 先句 1×1	
日曜	日朝 1×4	土晩 2×6	土晩 2×1
月曜	日朝 2×4	土晩 3×6	土晩 3×1
火曜	日朝 3×4	土晩 4×6	土晩 4×1
水曜	日朝 4×4	土晩 5×6	土晩 5×1
木曜	日朝 5×4	土晩 6×6	土晩 6×1
金曜	日朝 6×4	土晩 8×6	土晩 8×1
土曜	日朝 8×4	〔トマスの主日〕 1調	—

以上をまとめると、

あ)「光の週」が週日でありながら復活を寿ぐ主日の性格を併せ持ち、キリストの復活が曜日の交替を撤廃したこと

い) 晩課・朝課とともに「復活のスティヒラ」が歌われることで、キリストの復活が夜昼の差異を撤廃したこと

う)「光の週」を通じ、年間の8調が一巡することで、この週に宇宙的循環が集約されていること

え) 朝課には年間主日朝課の、晩課には年間主日前晩課の祈禱文が用いられ、いずれも復活を志向すること

お) このほか、「光の週」には日中の時課の内容がすべて同一となり、時間が均質となることなどが象徴的に表現されることになる。そして結局

キリストの復活とは、この世の時間を超えて永遠に持続する生命の始まりであること

がここで示されることになると言えるだろう。そしてこれらの基底にある8調システムを樹立したのがダマスコのヨハネであり、それを体系的に吸収したのはストゥディオス修道院の院長、テオドロスだったのである。なお、年間の朝課「讚美のスティヒラ」および晩課<主よあなたに向かって>の後のスティヒラのうちの後半4つ分は「アナトリウスのスティヒラ」と呼ばれる。その原意は明確ではないが、一説によれば「アナトリウス」とは「東方」を意味するところから、元来この部分は、ダマスコのヨハネに先立つ7世紀にすでにできあがっていて、その前にヨハネが新たにスティヒラを書き加えたのだ、という説明がなされる。「復活祭のスティヒラ」の原作者は不詳であるが、その起源は古くに遡ると思われ、位置的にこれは「アナトリウスのスティヒラ」と同じ場に置かれることから、8調システムの確立の際に、ダマスコのヨハネがこれらスティヒラの整備を行ったのかもしれない。

さて先に、10世紀、ポルフュロゲネトスにおけるアリストテレス的語彙の使用(「実体」と、当時の写字生グレゴリオスやエフレムにおけるアリストテレス筆写活動の実態を見た。次いで、ダマスコのヨハネにおける8調の整備とストゥディオスのテオドロスによるその採用の結果、ビザンティン典礼とくにその朝課が呈するに至った性格を明らかにし、「光の週」における年間の集約性と円環的構造を読み取ることができた。承知のようにアリストテレスは「最も神的な運動とは永続する円環運動である」と喝破し、さらにその運動を生起させる始動因として「不動の動者」を立てた。以降の課題として、この「不動の動者」の表現は何らかのかたちでビザンティン典礼のうちに求められるのか

ダマスコのヨハネのうちに、アリストテレスの受容がいかなる形で認められるのかを検証する作業に入ろう。まず先に の考察から進める。

ダマスコのヨハネによる作品の中で、全集の巻頭に置かれる作品に『弁証論』がある。伝承には小本と大本とが伝えられているが、この著作の第 45/62 章(小ノ大)は「運動について」と題されており、基本的にこの章は『カテゴリー論』第 14 章に基づいている。その末尾の部分には「アリストテレスの『自然学』第 5 巻には」と記された部分があり、ここでヨハネは、アリストテレスの両作品における記述の違いに言及している。こうしてダマスコのヨハネは、アリストテレスの『カテゴリー論』すなわち「オルガノン」だけでなく、『自然学』を手に行っていることが知られる。先に見たように、アリストテレスの自然学書関係の写本伝承は『形而上学』を含んでいたものと推測される。したがってヨハネは『自然学』とともに『形而上学』を手に行っていた可能性もありえよう。

それはともかく、ヨハネが「円運動のみが永遠であり不滅でありうる」(『自然学』265a27)という『自然学』におけるアリストテレスの発言を知っていたのは確かである。『自然学』のうちには、この円環運動のさらなる究極の始動者たる「第一の不動の動者」が明確に記されているわけではなく、その記述は『形而上学』においてたとえば次のように明確化される。「あるものがあり、これは常に動かされつつ休みなき運動をしている、そしてこの運動は円運動である。したがって、この第一の天界(第一の天界)は永遠的なものである。だがそれゆえに、さらにこの第一の天界を動かすところのあるもの(第一の不動の動者)がある」(『形而上学』第 12 巻 1072a)。そして言わば、そもそも『形而上学』全体の執筆目的とは、「もしなにか永遠的であり不動でありかつ離れて存するところのものが真に存在するとすれば、これを認識することが、或る理論的な学をなすべきことであることは明白である」(『形而上学』1026a10)と記されていることから、この「第一の不動の動者」の認識そのことにあったと言えるだろう。これこそ、アリストテレスにおける「神学」の目的であった。

ところで『形而上学』の冒頭部から中盤にかけては「実体」(ウシア)をめぐる議論が展開されている。「実体というのは、他のいかなる基体〔主語〕の属性〔述語〕でもなく、それ自らが他の属性〔述語〕の基体〔主語〕であるところのそれであった」(『形而上学』第 7 巻 1029a9)。そして彼は「不動の動者」を「実体」による表現をもって言い表している。「不動の動者、これは永遠的なものであり、実体であり、現実態である」(『形而上学』1072a)。こうして「不動の動者」は、究極の実体、すなわち質料を持たない純粹形相としての実体・純粋な現実態としても措定される。

このような「実体」概念はアリストテレスの全著作に一貫しており、そのことは全学問分野の基礎とされる「オルガノン」において、次のようなかたちですでに認められる。「実体、それも、もっとも厳しい意味で、第一に、なににもましてそう呼ばれる場合の実体は、ある何かが予め措定されていて、それについて述べられるのでもなく、またある何かが予め措定されていて、そのうちにおいて有るのでもないものであって、たとえば当のある人とか、当のある馬とかのごときである」(『カテゴリー論』2a11-14)。

したがってアリストテレスの体系にあっては、『自然学』を初めとした運動論系列において、「円環運動」の惹起者として「第一の不動の動者」の存在が要請されるとともに、「オルガノン」から出発する実体論の系譜にあって、「不動の動者」は「究極の実体」としてその存在を予測されるものであった。つまりダマスコのヨハネは、たとえ『形而上学』における円環運動の始動因としての「第一の不動の動者」の記述を知らなかったとしても、実体論系列の要請による「究極の第一実体」として、他からの説明方式を必要としない純粹形相の存在を予測しえたと考えられるのである。

いま指摘した点は、先に挙げた二つの問題のうちの第一の問い、すなわち「<不動の動者>の表現はビザンティン典礼のうちに何らかのかたちで求められるか」という問題への示唆を与えられると思われる。先に「光の歌」について述べたくだりにおいて、復活週すなわち光の週には朝課での福音朗読はなく、聖霊降臨後の年間主日において 11 個の福音朗読箇所が 1 サイクルを形成するという点を指摘し

た。これらの朗読箇所に関しては、非常に興味深い特徴がある。11 個の朗読箇所のうちマタイ福音書に関して、11 個のうちに含まれている 28.16 - 20 は宣教に向けての弟子の派遣を語るくだりであって、その直前に当たる 28.1 - 20 にイエスの復活に関する記述が含まれているという点である。このマタイ福音書における復活の記述は、先の年間主日における福音朗読からは外されて、聖土曜日の晩課 + 聖バジル典礼の際の聖書朗読に含まれる。聖土曜日の晩課は復活徹夜祭に先立つが、この聖土曜日の夕刻において「死」から「復活」への過ぎ越しが行われることは、晩課と聖バジル典礼の境界部にこのマタイ 28.1 - 20 の朗読が位置づけられ、その朗読に先立ち、司祭が式服を赤色から白色へと一変させるといった象徴的光景によって表される。そしてその朗読に引き続き、キリストの復活を前提とする聖体礼儀が、聖金曜日をはさんで聖土曜日夕刻に再開されるのである。

さて、年間主日朝課における福音書朗読のサイクルは、宣教に向けての弟子の派遣を語るマタイ 28.16 - 20 を筆頭に、それ以外はすべてイエスの復活を語る計 11 個の朗読箇所でもって形成される。復活週すなわち光の週には、朝課での福音朗読はなく、復活主日の晩課には、復活したイエスによる弟子たちへの現われを記す「ヨハネ福音書」20.19 - 25 が配される。それに先立つ同日の聖体礼儀は「ヨハネ福音書」冒頭箇所が多言語によって朗読され、福音がすみやかに世界中に伝えられることを表す。こうして、復活節の朝課においては、もはや復活を告げる福音書が朗読されることなく、ただ「復活カーノン」を毎朝歌い、「復活祭のステヒラ」を毎朝夕に朗誦し、この週を通して「8」で象徴される永遠のサイクルを刻んで回転する共同体がそこに現出するだけである。これはある意味で、復活を体現するこの共同体そのものが、言わばアリストテレスの言う「第一の天界」と化す一方、その中心に、福音書すなわち説明・記述の方式を必要とせず、永続する円環運動を生起させる「不動の動者」の存在を現出させる、比類なき具現体であるとは考えられないだろうか。

言うまでもなく、この「不動の動者」とは、以上のような象徴的表現から推察されるように、永遠の生命となって復活したイエス自身である。彼はすでに普遍的存在性を獲得しているがゆえに「不動」であり、かつ純粋形相としての現実態そのものと化した「究極の実体」に他ならない。こうしてビザンティン典礼で表現された「復活のイエス」は、アリストテレス的な要請による「神」をあますところなく成就する、いわば「ギリシア的・哲学的予型の完成者」であると言っても差し支えあるまい。

ポルフュロゲネトスは、先に見たように 11 個の復活福音朗読にあわせたかたちで「光の歌」を作成した。つまりこの 10 世紀中盤には、この部分以外の朝課の枠組みがすでに完成されていたものと考えられる。「光の週」を満たす復活のイエスは、まず「第一の天界」たる共同体に円環運動を生起させ、次いで復活を告げる福音のかたちで年間主日における復活の寿ぎを催させる。その主日は、年間を貫く 8 調のシステムによる連鎖を通じ、ひいてはすべての時間を円環運動へと招く。こうしてアリストテレス的天体運動論は、ビザンティン典礼のうちに一つの完成した表現を見出すことができると言えるだろう。その祖型を完成させたのは、上述のように 8 世紀ごろのダマスコのヨハネであり、10 世紀のポルフュロゲネトスに到るまでに、9 世紀のテオドロスらを中心としたストゥディオス修道院での整備があったと考えられる。テオドロスらは、元来ビテュニアのサックディオン修道院に起居したが、799 年首都に逃れ、ストゥディオス修道院に移った。テオドロスは聖画像破壊論争の中で、エルサレムのサヴァ修道院を範とすべきだとの見解を抱き、エルサレム総司教にサヴァ修道院の修士たちを派遣するよう要請した。遡ってサヴァ修道院は、614 年ペルシアによるエルサレム略奪の後、クレタのアンドレアスやダマスコのヨハネ、マイユーマのコスマスらの讃歌をもとに、大幅な改革と刷新を経験していた。それまでストゥディオスでは、典礼様式として「アコイメトイ（不眠修士）のアコルティア」と呼ばれるものが支配的であったが、これ以降サヴァ修道院の慣習を吸収し、折衷様式となったとされている。

上述のように、ダマスコのヨハネにおいてアリストテレス的宇宙論を基盤にほぼ完成していたビザンティン典礼の朝課構造は、それから 2 世紀の間に、ポルフュロゲネトスによる「光の歌」を加える

までに至った。その過程は、文献学的検証を加味するならば、基盤となるオルガノンの論理学を核に、百科全書主義的アリストテレス主義のかたちをとって展開するに至り、博識の修道士エフライムのような人文主義的活動を生むことになったと言えるだろう。そしてダマスコのヨハネ、ストゥディオスのテオドロス、副助祭グレゴリオス、エフライム、ポルフュロゲネトスといった一連の人々の経験の基層を形成したのは、アリストテレスと表裏一体となったビザンティン典礼の世界表現だったのである。

ところでアリストテレスの『カテゴリー論』には、「実体の最も固有な点は、それが同じであり数的に一つでありながら反対のものどもを受け容れうるものであることである」(4a10)という表現が見られる。ビザンティン典礼で表現される「復活のイエス」は、アリストテレス的な「究極の第一実体」の条件を見事に成就するものであったが、同じくアリストテレスにより「反対のものどもを受容する」と言われたような実体の側面をも満たしているであろうか。

先に、一年の典礼の中で頂点に位置づけられる復活徹夜祭が、ビザンティン典礼では復活の主日の朝課として執り行われることを記した。現行ローマ典礼では、この復活徹夜祭も聖体礼儀の形式で、しかも多数の聖書朗読を伴って行われる。一方ビザンティン典礼では「光の週」における朝課も、一貫して復活徹夜祭の式次第を踏襲し、聖書朗読はない。

聖体礼儀は、ビザンティン典礼・ローマ典礼を問わず、信徒・非信徒の差異化を伴う。これは歴史的に考えても、最後の晩餐が弟子たちという閉鎖的世界で行われたことを考えれば当然であるといえる。これに対して朝課は、復活という驚くべき事実が、香油を携える婦人たちから弟子たちへと伝えられ信じられてゆくことの確認を通して、復活の生命の永遠性を寿ぐ祝いの儀礼(「シナクシス」)であり、そこに差異化・排除性といった側面は見られない。これはビザンティン典礼による朝課が、永遠の生命たる復活のイエスを、いわば究極の実体としてその中心に抱くこと、そしてその復活の生命は、無限の包容性をもって伝播し、新たな共同体を形成する生命体であることを表現したものであろう。したがってこの面に関しても、アリストテレス的な「実体」の理念は十分に成就されていると言える。

以下簡潔にまとめて本報告の結論としたい。ビザンティン思想の基盤ともいえるビザンティン典礼は、その精髓を朝課に見出す。復活のイエスをその中心に頂く朝課は、「光の週」を起点として、年間の暦日を<永遠の生命>のもとに円環運動させる宇宙論的構造を呈しており、古典ギリシア的・哲学的宇宙論を見事に成就完成させるものであった。その根底には、ダマスコのヨハネによるアリストテレス的運動論・実体論・神論の止揚があり、これはストゥディオス修道院のテオドロスらを経て、ポルフュロゲネトスに到るまでのプロセスを歩む中で、百科全書主義的な相貌を見せるに至った。そこに見出されたのは、歴史を刻みつつ形成される共同体的「知」のすがたであるとともに、非差異化・非排除性をもって無限に伝播する生命を核に形成される、真の共同体の姿であったと言えるだろう。そこには、西方スコラ期に開花したアリストテレス主義とは大きく異なった形で、古典的英知の共同体的成就が見られたのである。